

非言語のコミュニケーションであったとしても、皆さんの感情というのは、子どもから何が伝わってきてそういう気持ちになったのかということを考えることも重要です。ここで難しいのは、自分たちの考え、自分たちの気持ちとか感情について話をしたりすることが非常に難しいということです。最終的に、子どもたちに、そういった抱えている気持ちを言葉で表現できるように持って行きたいわけですが。

「職場を離れるということ」

気持ちを行動で示すのではなくて、やはり、お手本となるべきは自分たちです。自分たちの感情、気持ちについて、お互いに話し合うことから始めなくてはいいのです。ですから、気持ちをきちんと言葉にして語る事ができればできるほど、それが行動となって示される可能性は低くなってくると思います。

これは重要なポイントなので、少し考えてお話ししたいと思います。

この職場を離れようという決断をされた方がおられたとすれば、それはある意味、act out と言いますが、行動でそれを示そうとしていた現れかもしれません。子どもたちもトラウマを受けています。育児放棄されたり、拒絶されたり、自分は望まれない子だというトラウマを持つ子どもたちの気持ちというのは、ケアラーが離職することによって、新たにそれが行動となって、改めて自分は見捨てられた、拒絶されたということになるわけです。

養護施設の職員の方の離職率を効果的に改善する、若しくは里親を辞めたいという方の割合を減らしていく効果的なやり方の一つとして、大人同士のコミュニケーショ

ンの質を高めるということが挙げられるかと思っています。

ある施設（グループホーム規模）では、5人のスタッフの方がいましたが、1年間で、そのうち4名が離職したというケースがありました。また、そこでは、コミュニケーションの質を高めようということで焦点を当てて取り組み、チームミーティングを開催し、ちゃんと信頼できる方の指導を得て、supervision を得ることによって、職員の方一人一人の指導をしていったということがありました。その結果、劇的に状況が改善し、離職率もかなり減りました。年間、4名の方が離職されていたような施設でしたが、それが年間1名辞める程度にまで改善していきました。その結果、子どもたちにどういう影響が出たかということ、子どもたちの関係も良くなってきたということで、子どもたちもお互い仲良くできるようになってきました。

「相手の意見をよく聞くこと」

子どもの養育に関わるということは、そもそも疲れる仕事でありまして、それが自分の子どもであっても子育てというのは本当に疲れ果ててしまうことだと思いますので、時々、ご自分の伴侶若しくはパートナーの方や、同僚の方と気持ちを共有することができれば、状況は何も変わらなくても少し気分は良くなると思います。

誰かが聞いてくれて理解してくれるというだけでも、感情的なところでは改善すると思います。養護を受けている子どもたちというのは、往々にしてこれまで誰からも耳を傾けてもらえなかったという子が多いので、その子の言うことを聞いてあげるだけでも、非常に大きな変化であるわけです。

トラウマを負った子どもたち、特に自分がコントロールできない状況の中で、大きな、強い大人に虐待されたということで、自らなす術もなく、本当に怖い思いをしたわけです。子どもたちが回復を遂げる過程の中で、まず、いろんな選択肢を与えてあげることが一つ挙げられるかと思います。日常生活の中で自分の意見を聞いてもらう、自分たちの希望を叶えてもらえるということ、自分が選択権を持っているということが、resilienceにつながるということになります。

「レジリエンス」

Resilience レジリエンスという言葉について補足しますと、これまでの世界観というのが、自分たちがコントロールできない世の中だと思っている子どもが、トラウマを受けている子どもたちの中には非常に多いので、その考えを持ち続けてしまうと、大変なダメージが生じてしまいます。

17. Resilience 回復力

絶えず側にいて心をくわしてくれる大人の存在は 人生早期に心身を害する状況に屈服していたであろう子どもたちに、きわめて元気づける影響をもたらす。レジリエンスという考え方は、子どもの発達や、発達に混乱を伴った子どもたちがどう回復するかを理解の中心となっている。

社会的養護を受けるまでに多くの子どもたちは無数の危険因子に曝されている。子どものレジリエンスに基づく仕事は、子どもが持つ力と肯定的な面の確認に焦点をあてる。

ギリガン (Gilligan 2000) は、レジリエンスの3つの源を、安全基地、自尊心、自己治癒力と特定している。

教育の成功は、子どもたちに逆境の体験を克服し、レジリエンスを強めるという最も明確な方法のひとつとなることが出来る。独立した生活に移行する前の教育の成功は、明確な成果と相関することが明らかにされている。

18. The following key points have been found to promote resilience
下記の要点がレジリエンスを強める

- ・強力な社会的支援ネットワーク
- ・少なくとも一人の監条件で支えてくれる親や親の代理の存在
- ・適切な学習体験 - 子どもの教育の達成を支えることは、長期にわたりレジリエンスと確実な成果をもたらす上に大変重要
- ・克服する気持ちと自らの努力が強いを生み出すという信念
- ・様々な課外活動の参加
- ・緩慢的な学習ばかりでなく有益なことも認識されるように、逆境を乗り越える能力
- ・他人を助けることで“思いが生じる”能力と機会
- ・挑戦的な状況からは避けるより、むしろうまく処理する力が育つように支える

そうした活動には下記のことか含まれる

・動物の世話をする ・スポーツや他の余暇活動 ・表現と創作芸術 ・アルバイトやボランティア活動

社会的養護の活動は、その中に含まれる特定の技能だけでなく人間関係の能力を築くにも役立つ。そうした活動は、正常な生活感をもたらすので、アンゲリン (Anglin 2002) は社会的養護下にある子どもたちに大変重要であることを見出している。

自分たちが影響力を持つことができる日

常生活の中で選択肢があるのだ、自分がコントロールできるのだという感覚を与えることが非常に重要でレジリエンスに繋がります。また、子ども同士仲良くできるかどうかということも、回復において非常に大きな意味を持っていますので、小さな子どもたちの間でうまくやっつけていける子ほど、成長してからもいい結果が出ていることがわかっています。

今日はいろんなトピックスについてお話が飛びましたが、ここで、ちょっと面白いスライドをお見せします。

Projection 投影



これは投影という題になっていますが、おそらく右側の方がケアラーかと思いますが、若い男の子が話をしています。ここで何を男の子が言っているかということ、「いつも自分は黙れ、黙れと言われてきた。誰も自分のことを聞いてくれない。あなたもどうせそうでしょう？」と言っています。「僕に黙って欲しいんでしょう？」と言うのです。実際のところ、この反対側に座っている男性は、黙って聞いてあげたいと思っているのですが、男の子は全くそれと逆の反応を示しています。本当はこの子は何を言おうとしているのか。

もし、私がこの反対側に座っているケアラーであれば、自分自身の気持ちについて、

まず考え始めるかと思います。私に対して
どういう言葉が返ってきているのか、どう
いうコミュニケーションが取られているの
か。たとえば、ボディ・ランゲージですね。
体が示しているコミュニケーションは何な
のかということ、まずとらえようとしま
す。自分の気持ちとしては、段々イライラ
してきたり、嫌な思いになっているかと思
います。おそらく、それは、その子が感じ
ている気持ちと同じような感情ではないか
と思います。相手の子どもも、ちょっと怒
りを感じてきたり、イライラしてきたり、
若しくは心配な気持ちになっているかもし
れません。誰も自分の言うことを聞いてく
れないということで、イライラを募らせて
いるのかもしれません。そういう気持ちに
なっているのであれば、「何か大事なこと言
いたいのか」と言葉をかけるかもしませ
ん。どうやって、その子の声に耳を傾けて
あげられるかということで、このスライド
を取り上げました。一方で、もし私が非常
にストレスを抱えていて、あまりきちんと
考えることができない状況であった場合、
次のスライドのような反応を返すかもし
れません。

Projective Identification 投影性同一視



これは、「黙れ！」と怒鳴っているのです
が、この男の子が想定した通りのシナリオ
となったのです。ケアラーはそう言ってし
まうと、おそらく後で後悔し、本当はそう
いうふうに言うつもりはなかったのに、悪
かったなと後悔するかもしれません。これ
は、少年の気持ちが相手に投影されたので
す。ここでは、その子は、あまり居心地の
いい状態ではない、違和感を感じているよ
うな感情だったのです。この子が、相手
に対して、目の前にいる人にも同じような
感情を抱かせようとしたのです。出発点は、
その子どもが抱いた感情であり、それが、
私たちのほうに移って来て、それを act out
する、行動となって表れてしまうというこ
とになります。これは、自分たちの感情、
気持ちについて考える力を失ってしまった
時に起こることですが、トラウマを抱えた
子どもたちとコミュニケーションを取ると
きは、必ず自分たちの気持ちを振り返る、
そして、自分たちの行動とか、自らが発す
る言葉について、振り返ったり考えたりす
る能力を必ず維持していかななくてはいけ
ません。

この例では、子どもに対して、「黙れ！」
と言ってしまったのですが、子どもから返
って来る反応は、「どうしちゃったんです
か?」「機嫌が悪いね?」と言われるかもし
れません。ある意味、今の一連のやり取り
の中で子どもが満足感を得るかもしれない
のです。そもそも自分が抱いていた居心地
の悪い感情を相手に投げることによって、
そこで取り込んでもらえたということから。

何かご質問ある方いらっしゃいますか?

女性3：先ほど、職員のチームを作る上で、すごく有益なお話を聞かせてもらいましたが、そのスタッフの期待値とか、チームを作っていく上で、子どものケアをするためのスタッフですので、そこを踏まえた上でのやり取りをされたのかなと想像するのですが、先生のおっしゃっていた期待値のところを、もうちょっと具体的に教えていただけたらと思います。

「養護施設の職員のあり方」

トムリンソン：養護施設の職員の有り方については、その施設のトップのリーダーシップが非常に重要になってきます。1970年代、80年代、英国において、施設内で虐待を受けた子どもたちの事例が取り上げられるようになり、政府が大掛かりな調査に乗り出し、英国内の養護施設の調査を始めました。そこで、施設の中で、子どもたちに効果的な対応をしていた施設とそうでない施設の差が明らかになってきました。重要な違いをもたらす要因として、最近の研究の中でもいくつかわかってきていることがあります。まず、挙げられたのがリーダーシップです。このリーダーシップといいますが、施設を運営するに当たって、きちんと効果的に、管理能力と言いますか、指導能力が働いているかどうかということで、最初にまず、施設の職員の方に対して、適切な支援を与えているかどうか、そして、ちゃんと方向性を示して、道筋を示した上で指導をしているかどうかということが挙げられています。リーダーシップは、ときに、周りに対して確固たる態度を示すということも一環としてあるかと思っています。ですから、明確に何を期待しているのかを示すのがリーダーシップの資質の一つである

かと思っています。これは、必ずしもマネージャーだけの仕事というわけではないと思います。たとえば、2人のケアラーの方が一緒に仕事をされて、より経験を積んだシニアの職員の方のほうがリーダーシップをとって、こういう期待値を持っているということをはっきりと示していく、あるべき姿を示していくということをしていくべきだと思います。また、職員の方も、子どもに対して何を期待しているのかということを確認していくことも必要です。

「施設の中に築かれた文化」

もうひとつ、施設において、非常に肯定的な結果につながったことのひとつとして、確固たる文化を作り上げていくということです。どういう意味で、確固たる文化と言うかですが、やはり、その施設の中では、どういう行動を取れば、どういう結果に結びつくのか、そして、その理由はどういうところにあるのかを明確に理解して、それを浸透させることが、きちんとしたカルチャーを作り上げる土台になるかと思っています。それに基づいて、子どもたちが、きちんとした分別のある行動を取り、そのために、職員の間、チーム間の基盤となる文化が必要になってきます。そういうプラスの文化的な基盤がある施設を訪問すると、たとえば、3、4名の方といろいろな話をして次に、個別に職員の方とお話した場合に、よい形で運営されている施設であれば、どなたとお話をしても同じような、一貫性のあるメッセージが返って来ると思います。一方で、そこまでカルチャーが浸透していない施設であれば、聞く人、聞く人で違う答えが返って来るので、その場に身を置くことが混乱を招いてしまうような場になっ

てしまうかと思えます。大人の私でも混乱してしまうような環境であれば、それが、トラウマを受けた子どもたちにとってどういう環境であるかということは、容易にお察しいただけるかと思えます。既に混乱したところから出発している子どもたちです。

「終わりにあたって」

時間も迫って参りましたが、最後に申し上げたいことは、私にとって、皆様とお話しさせていただく機会というのは大変実りのある、興味深い時間になっておりますが、私の話も、皆様にとってご参考になればと願っています。

こういう形でお話させていただく時には、当初想定していたことと違う方向に話が展開していくことがあります。ときに、皆様からいただくご質問の内容で話が方向転換することもありますし、また、進めていく中で、いろんなアイデアや考えが浮かんできて、そちらの方向で進行するということもあります。

お話の最後で、やはり出てくるのは、トラウマを抱えている子どもたちとコミュニケーションを取るということと、世話をする職員同士、ケアラー同士でコミュニケーションを取るということとはつながっております。我々同士、大人同士がコミュニケーションを取る、それが子どもたちとのコミュニケーションにも反映されますし、また、子どもたち同士でのコミュニケーションにも反映されてゆきます。まず、原則として、肯定的なコミュニケーションを確立する基盤を整えていくということが、非常に有益かと思えます。注意深く傾聴することです。また、注意深く観察すると

ということも挙げられます。あくまでも、オープンな姿勢で――、あまり判断を下したり、批判的な態度を示すとうまくいかないことが多いと思えます。特に、トラウマを受けた子どもたちというのは、本当にギリギリのところにいるので、あまり批判的な目で見られるとうまく機能しないと思えます。やはり、思いやりを持った姿勢で対応していただく必要があります。トラウマを抱えている子どもたちは、あまりうまく考えることができない、考え巡らすということが非常に難しいので、思いやりを持って、その辺を配慮してコミュニケーションを取ることです。先ほども、あまり子ども同士仲良くできなかつたり、お互いにちょっと分別がない形で行動を取ってしまったという話をしましたが、皆さまも是非機会がありましたら、先ほどから引用しているブルース・ペリーさんの書かれた本（B. D. ペリー、M. サラヴィッツ著 戸根由紀恵訳「子どもの共感力を育てる」紀伊国屋書店 2012年）をお目通しいただければと思いますが、子どもたちに分別ある行動をとってもらいたいのであれば、自ら分別を持つ必要があると、彼は語っています。子どもたちにとっても、ただ行動を修正するために罰するというだけではなくて、そういうやり方ではなくて、きちんと子どもたちが納得できるような形で理性を持った説明をする、そういうアプローチをとっていただきたいと思えます。

それでは、本日はお招きいただきまして、ありがとうございます。また、10日間に渡る招聘で開原先生に、こういう機会をいただき、皆様にお話しさせていただいたことを感謝申し上げます。ありがとうございます。

した。

司会：有難うございました。では、トムリンソン先生と通訳の辻さんに拍手で感謝したいとおもいます。（拍手）

最後に、当センターのかつての次長である開原先生がこの会を設定して下さいましたので、開原先生にも拍手をお願いします。

（拍手）

《以上終了》

児童相談センター午後のセッション

Tomlinson 氏と治療スタッフの座談会

日時；2013年10月31日13:00~14:20

(治療指導部門ばおの見学後、ピザをいただきながらのセッション)

場所：児童相談センター新庁舎 研修室

講師：パトリック・トムリンソン

出席者：治療指導課スタッフ：治療指導課長 治療指導係長 心理職 A、心理職 B、心理職 C、作業療法士 D

読売新聞記者；小林

国立武蔵野学院：徳永祥子(通訳協力)

プロジェクト代表：開原

以上 10 名

録音記録編集：開原久代



開原：では自己紹介からお願いします。

A：心理士です。

小林：小林ともうします。部外者でお邪魔しています。読売新聞の記者をしております。いろいろなトラウマをどうケアするかという中で、今、施設から里親へとという流れがあると思いますが、こうするにあたっての課題を特集でとりあげたいと思い、施設や里親への支援の問題について開原先生に教えを乞おうとしましたら、こういうセッションがあつて、トムリンソン先生が来られるということを伺って半分押しかけてまいりました。よろしくをお願いします。

B：心理士です。Aさんと二人一緒に、施設に子どもが措置されている虐待した父親や母親のファミリー・ジョイント・グループや、虐待した母親のカウンセリングを担当したり、児童養護施設を訪問して職員へのコンサルテーションをしています。

C：臨床心理士ですが、今はここのレジデンシャルケア部門（ばお）で子どもをみています。

トムリンソン：ここに3人のセラピストがおら

れますが、サイコセラピストとして日本ではどんなトレーニングを受けているのですか？

B：日本には心理士の国家資格がなくて、これから出来る方向にあるのですが、民間の心理士の資格をとる人が多いです。それには、まず大学院の修士課程を卒業して、試験を受けるのです。大学院では、病院とかクリニックで実習をしなければなりません。

C：大学院によって内容の濃さに違いがあり、大学の中には、相談室を設けて、いろいろなケースを担当して、毎週、2年間コンサルテーションを受けることができる場所がありますが、大学院によっては自分で実習先を探して1カ月だけ実習をするだけという場合もあります。

B：資格をもっている心理士もあれば、持っていない心理士もあり、日本では統一した資格を持っていないのが特徴です。東京都の場合は、心理職の公務員試験で採用されています。サイコセラピストになるには、英国の方がハードルは高いのでしょうか？

トムリンソン：子どものカウンセラー、認知行動療法家、力動精神療法家などと、子どもの精神分析家がありますが、子どもの精神分析のセラピストになるには長いトレーニングが必要です。精神分析のセラピストのところから自ら、3年間通い、直接教育分析を受けなければなりません。精神分析、赤ちゃん観察、セラピー、ケーススタディをスーパーバイザーから受けなければなりません。資格がとれるかは、スーパーバイザーの意見にかかっていますが、試験はありません。伊東先生がおっしゃっていたように、トレーニングは時間とお金がかかり、特に、子どもの精神分析家は長いトレーニングが必要なので、セラピストとしてはカウンセラーは多いですが、子どもの分析家は少数です。皆様ご存じのタピストッククリニックが、児童分析で有名です。

英国の最近の傾向ですが、米国では大分前からですが、短いセラピーbrief therapyへとシフトしています。それまでは、子どもでも1年、2年とセラピーを受けることがありましたが、英国では伝統的な方法でトレーニングを受けても仕事がないので伝統的なセラピーをする人が減ってきています。

(自己紹介の続き、開原、課長、係長は省略してDに)

D：作業療法士です。月2回、治療指導課で、幼児の感覚統合療法をやっています。

A：他のスタッフから質問を預かっているのですが、よろしいですか？

英国の施設では、学習の支援をどうやっているか聞いてほしいと言われているので。

トムリンソン：子どもたちで、読み書きや基礎知識がない子には1対1の学習支援をしています。ある子どもは、地域の学校に行きますが、クラスで1対1の対応を補助の人を配置してもらってやる場合があります。今日、講演でお話した子どもたちは、施設内の学校で対応していました。子どもがトラウマを受けた年齢まで戻って対応することが大事なので、1~2歳でトラウマを受けた子どもには、読み書きではなく、遊びを大事にします。ふつうの親が幼児にしているように、12歳の子どもでも基本的には本の読み聞かせを最初にやります。

それで、子どもたちは追いついてゆくこともありますが、子どもたちは、学校から追放されたりプレッシャー体験があるので、プレッシャーを除いてあげることも大事です。経過的には実年齢に追い付くことがわかっています。

治療指導課長：経験的にはわかっていますし、私どもはそのとおりに取り組んでいるのですが、一般の施設ではそういう風に切り替えられないので大変です。

トムリンソン：同じことが私の働いた施設でもありましたが、大変でした。12歳の子どもには12歳の勉強をさせていた職員の考えを変えてゆくの3年から5年かけて改善させたことがあります。子どもにプレッシャーをかけるのは有効でないというエビデンスがあるといいですし、議論があればいいのですが。

開原：調布学園でも同じ質問があり、施設ではボランティアが学習を助けているけれど、英国はボランティアではないということでしたが、確認させて下さい。

トムリンソン：ボランティアではなくフルタイムの職員が学習をみています。地域の普通の学校に行く場合、施設内の学校に行く場合がありますが、学校に経験のある教師がいて学校で学ぶこともありますし、施設のケアラーが取り組むこともあります。

B：英国では、学校にそうしたニーズのある子

どもがいれば政府はエイドのお金を出すのですか。日本は35人の子どもに一人の教師と決められているので。

トムリンソン：時にクラスにアシスタントがつきます。3人の子に1人というように、そこにお金をかけなければ、クラスは崩壊してしまいます。英国では義務教育でも10年前までは、すぐ退学させていましたが、学校に来なければ問題を外でおこしているわけですからサポーターをつけることは理解されています。最近は、なんとか学校にとどめようとしています。

A：日本では、学校で受け入れてくれなくて、施設に一杯子どもが残っていてカオス状態になっているところがあります。

小中学生で、学校に来ない子は、学校は受け入れてくれないのです。昼間、子どもが一杯で施設は大変です。

トムリンソン：英国でも、同じことがあり、子どもが施設に長くいるのでスタッフは非常に疲れてしまいます。ミーティングも出来ないのです。

(自己紹介の続き。残りの徳永さん)

徳永：国立武蔵野学院で今年から、夫婦で寮を担当しています。その前10年間は大阪の児童自立支援施設阿武山学園で夫婦で仕事をしていました。その前はアイルランドと英国で児童福祉を学びましたが（ソーシャルワーカーですかという質問）、若い時の留学でしたので、ソーシャルワーカーの資格をとるには21歳以上でなければならなかったのもそのコースではなく、ソーシャル・コミュニティ・ケアの国家資格をとりました。

開原：ひととおりで自己紹介が終わりましたが、どうすすめましょうか？

治療指導課長：この施設をごらんになって、また宿泊部門(ばお)をどう思われましたか？

トムリンソン：とにかく新しくてクリーンで、手入れがゆきとどいています。英国では、多くの建物は古くてみすばらしいですし、特に政府施設や病院はくたびれ果てていますので。この宿泊部門(ばお)は子どものために設計されていて、玩具や絵なども子どものことをよく考えていることがわかります。

ここをよりよい場所にするには、子どもにど

うすればよいか聞くことが大事です。親御さんにも聞くことです。

以前は、子どもの視点で取り組まれなかった時期があり、私が以前働いていた施設が、それまでは思春期の子どもがいたところに幼児が入ることになったのですが、鏡の位置が高いところにあったり、コート掛けのフックが届かないところにあったりして大変でした。

子どもの環境のことを考えるなら、子どもの意見を聞いて取り入れることです。そうすれば子どもは自分が尊重されていると感じ、環境に愛着をもつようになりますが、このように、数か月だけの滞在だと難しいかも知れません。入所期間が2~3年なら子どもが気に入るように替えてゆくことが出来ますが。

昨年、日本のある施設を見学させていただきましたが、冷蔵庫の中が空っぽでした。(黙ってあけたんですか?という質問)愛情剥奪やネグレクトなどで入所する子どもは飢えているので、子どもが入所する家(里親家庭やグループホーム)に食べ物一杯があると安心するのですが――。

私が最初に働いていた治療的コミュニティ(コッツワルド・コミュニティ)では、冷蔵庫の中にミルクを沢山置いていました。何かトラブルがある時はミルクの消費量が多くなりました。

今朝、講義で観察の大切さを話しましたが、ミルクの消費量を見るだけで子どもの状況を知ることが出来ます。



C: いろんな視点があっても、そのことに気が付かないのです。ミルクの消費量をみるという着眼点に気が付かないのですが――。

トムリンソン: ありがとう。とても大事な点です。ただ、いろいろな視点がいつも正しいわけではないのです。

私が寮長をしていた時、寮に戻ったらプレイ

ルームの中が、カーペット、天井、凡てがペイントされていてショックを受けました。抽象画家の Jackson Pollock の画のように、いろんな色、赤、黄、グリーンペンキが使われて散乱していました。もともと、大工さんが使っていたペンキの残りが置き忘れてあったのでした。子どもたちはプレイルームの鍵を締めて塗っていたのでした(楽しそう!という声)。

それで、我々は二つのことをやらなければならなくなりました。一つは、片づけること。もう一つはどうして、彼らはこんなことをしたのかを考えることでした。

この時期、3~4人の男の子たちの間で性的な関係が発生していました。セラピストは感じていたのですが、踏み込めない時でした。このことをきっかけに、性的な問題について話し合うようになりました。

皆さんは英国ではやっているゲーム、クルード(CRUDE PLAY)を知っていますか? 誰が殺人を犯したのかを当てるゲームで、登場人物の名前が、マスタード氏、ピーコック夫人、グリーン氏というような名前です。誰が殺人をしたのか、どの部屋で、どの武器を使ったのか、ナイフかなどを当てるゲームで、ふうつの子どものゲームです。(開原: シャロックホームズのお国柄ですね)

実は、新しいボランティアの人が寮に来てまして、その人がそのゲームの登場人物を壁に描いてくれてあったのです。その絵のある部屋にペンキをまき散らしたわけで、子どもたちの言い分は「殺人犯は誰かという絵に見守られているのは嫌だったから」と言うのです。

ボランティアの方は、子どもを楽しませようとして画いたのですが、一部の子どものみは興奮し、性的な問題のある子どもはみつかると不安になったのです。

このことを子どもたちと話し合う中で、結果として、片づけは、大人も手伝うけれど、互いに助け合うと早く終わることを伝えました。手伝ってくれないと、大人だけだと時間がかかるから、夕方からのサッカーを一緒に出来ないねと伝えました。張本人たちも2~3日たつと手伝ってくれるようになり、1週間たつと、問題のなかった子どもたちも手伝ってくれました。

Reparation により新しい環境をつくったのです。

しかし、子どもたちに彼らの行動の結果には、肯定的か否定的かの結果があることを理解させることは重要である。

我々は、彼らの行動の肯定的な結果について、たとえ否定的な結果の方が多くても同じように理解することを支援する必要がある。

これは、子どもたちが自分たちは傷つけたり、破壊することが出来ることをあまりによく知っているので、自分たちが喜びを与えることをしたり、他人の気分をよくすることを考えたことがないからである。彼らは自分たちは他人にとって無意味な存在で、自分たちが影響力をもちなんらかの意味を感じる唯一の方法は挑発的であることだとしばしば感じている。

我々が子どもに彼らの行動の否定的な結果について理解させ、可能ならそれを修正するために何かをする必要がある時、その行動への結果が妥当で論理的であればあるほど、子どもはよく理解するのである。

たとえば、もし子どもが家の中の何かを壊した時、早く寝かしつけられるより、それを修理するのを助けてやることもっと妥当である。壊された物を修理するのを支援することは自然な結果として理解される。

B：宿泊環境のセラピーとしてケアワーカー同士、こうした養育方法を共有しているのですか。トレーニングなどで手法があるのですか？

トムリンソン：1960~1970年代は、英国政府は、治療的コミュニティという入所施設を沢山作り、日常の生活の場を治療的な機会としてとらえることが強調されました。その頃は、サイコセラピーの理論を使った取組が盛んで、単なるトレーニングではなく、毎週スーパーバイズを受けることによりスタッフのレベルが保たれていました。

ただ、過去 20 年の間に、英国では大規模の施設は否定され閉鎖されてゆきました。そして、この 10~20 年は虐待にフォーカスが注がれ、子どもを死なせないようにすることが強調され、結果として治療的施設、開原先生たちが 2011 年に訪問した SACCS センターがリーダー的役割をとっていますが、そういうところがどんどん少なくなっているというのが現状なのです。

治療指導課長：もっと、お話を伺いたいのですが、予定の時間過ぎてしまいましたので、ここで終了させていただきます。有難うございました。

開原：今日のお話と関連した情報は、配布した資料の中に含まれておりますので、下手な翻訳ですが、ご参照ください。

終了

特別臨床セミナー アンケート結果

開催日時 会場	平成 25 年 10 月 31 日 (木) 9 時 30 分～12 時 30 分 東京都児童相談センター 6 階 大研修室
参加職員	児童養護施設職員 15 名 児童自立支援施設職員 10 名 自立援助ホーム職員 3 名 児童相談所職員 30 名 計 58 名

テーマ：「トラウマを背負った子どもたちと心を通わせるには」

講師：パトリック・トムリンソン氏 (治療的施設ケア コンサルタント)

<アンケートより参加者の感想〔抜粋〕 *回答数 44>

<研修の内容はどうだったか？>	
「1」とても参考になった・・・	30 人 (68%)
「2」参考になった・・・	13 人 (30%)
「3」どちらともいえない・・・	0 人 (%)
「4」あまり参考にならない・・・	0 人 (%)
「5」まったく参考にならない・・・	0 人 無回答・・・1 人 (2%)

- ・ 場に応じた話題の提供と伝えようとしていた姿勢。何よりも通訳の方のていねいな説明。
- ・ まず子ども同士の関係が施設職員間の影響であることや職員のケアが必要であることを強調されていたことに驚いた。別な側面から支援を見直すことができた。
- ・ イギリスでの取り組みを紹介してくれて、施設内虐待の調査から出された結果から施設をどう整えていけばいいのかわかりました。
- ・ 体験から語られたとても貴重なお話だった。「言葉になる前のコミュニケーション」が印象に残る。
ことばのやりとりでうまくいかなかったり、腑に落ちない経験に児の私を見たり、感じたりする感覚の過敏さがあるのでは？とちょうど感じた。自分の態度をいつも観察する目をどこかで持っていないとならないと思った。
- ・ 子どもと接するなかで時折子どもの要求に応えすぎることの不安や叱らなくてはいけないのではないかという義務感襲われることも多いので、今回の研修で子どもの願いを叶えることの大切さを再確認できてよかった。
- ・ ケアワーカー側の問題、子どもに与える影響について改めて考えさせられた。子どもの反応は大人—子ども間の相互作用であるということなどを痛感する。そこから支援システムの問題、施設の構造、人事の問題等も考えさせられる。
- ・ 共生の実体験が多く盛り込まれていて具体的でわかりやすかった。
- ・ 全体的にトラウマを抱える子どもと関わるための振り返りが確認できたこと、また、先生自身の体験に基づいたお話もうかがえたことがよかった。
- ・ 今、苦しんでいることのその先にあるべきもの、働きかたとか処遇が様々な苦労話の中から感じとれた。
- ・ コミュニケーションそのものと自分自身のことを振り返る時間が持てた。
- ・ 子どもと向き合う際の最も大事な心構えを教えていただけてよかった。通訳もわかりやすかった。
- ・ 大人がどのように対応するのか、職員間のコミュニケーションを子どもがよく見ているということがよく理解できた。
- ・ 施設職員側の子どもと関わるコツと仕事に対する姿勢が子どもに与える影響について考えることができた。
- ・ 英国での施設ケアでも、日本のケアワーカーと同じように子どもと向き合うことに困難を感

じて日々ケアをしているのだと非常に身近に感じた。大切とされることは共通していることを実感した。

- ・ 昨年度乳児院でお話をお聞きしたことがあったが、今回も支援の基本、重要なことの見地を示していただきそこから現場の状況を見直してみると改善点とよい点が見えてくる。
- ・ 最初のスライドはひきつけられた。わかっていたが、観察・記録がとても重要で改めて大切さがわかった。子どもに接する前には職員の大人のあり方も重要であることをもう一度認識した。
- ・ 対子どもとのコミュニケーションの重要性だけでなく、大人同士のコミュニケーションの必要性についてもお話いただけてよかった。
- ・ トラウマを扱うことにこだわるよりは、まずは子どもたちの心に寄り添い、コミュニケーションを取れるような関係になることが大切なのだと思う。虐待のダメージは深刻で生物学的にも心理学的にも大きな影響を与えるのだと思った。子どもの行動観察を丁寧にするだけでも子どもの行動や意識が変わるとするのはとても勉強になった。子どもに気をかける、注目の大切さを改めて知った。
- ・ 特別なプログラムなどでなく、施設の中で関わりというエッセンスが詰まった内容で、この内容が広がりを持って取り組んでいけるようにと思う。
- ・ トラウマを受けた子どもだけでなく、乳児院内で関わるすべての子どもに関わっていく上で必要なことが改めて考えさせられた。チームとして大人同士のコミュニケーションをよいものにするなど勉強になった。
- ・ 子どものために大人間で何をするかというテーマが自分の現在の臨床的なテーマと重なったためとても参考になった。
- ・ 施設職員が子どもに与える影響の大きさを痛感した。
- ・ 職員同士のコミュニケーションのあり方、チームの効果的あり方など現在の職場を考えるととてもよいきっかけになった。
- ・ 施設や一時保護所の研修などで伝えたい。何より先生のお人柄に触れ、ご自身の体験からのお話を聞けてよかった。
- ・ 原点に戻れて考えられるきっかけになった。特に発達段階を考える重要性を学んだ。
- ・ 普段の自身のコミュニケーションの取り方(子どもに対する言語的、非言語的、観察や注目、傾聴)について改めて振り返るよい機会になった。
- ・ 具体的な対応方法とその方法の根拠となる理論をわかりやすく話していただいてよかった。ペアレントトレーニングなどで、予測、予告の方法があるがなぜ必要か理解できてよかった。
- ・ トラウマを背負った子どもへの接し方の基本をきっちりとかつあたたかく教えてもらった。
- ・ 実践に基づいた内容で勉強になった。
- ・ 施設に入所する児童の特性が変化してきており、トラウマを背負った児童、発達に偏りのある児童が多くなってきているなかで、スタッフ間で「今までと違う」、「自分が行ってきた支援が通用しない」という声が多く聞かれるようになった。トラウマに対する支援は難しく、ケアワーカーと心理士の協働のために今回の研修で具体的な対応方法や施設の構造として必要なこと等を学べたことは今後の支援に大きくつながるきっかけになると感じた。
- ・ 職員同士の関係が子どもたちに反映するという話はとても興味深く聞いた。まず大人からというのは実は難しい所だと感じた。
- ・ 年齢に合わせて関わっていくのではなく、その子ども自身に視線を合わせて関わる必要があるのだと思った。
- ・ 組織の視点についてうかがえて新鮮だった。

<もう少し聞きたかったこと>

- ・ 「理性的に話す」ということだったが、話もうまく入らないような場合はどうしたらいいか、もう少し聞きたかった。
- ・ より具体的な技術やアイディア、アプローチの理論、ツールなどについて詳しくうかがってみたい。
- ・ トラウマを負った子ども達が成長していく段階について
- ・ 基本的な姿勢に加えて実際のセラピーの内容等を聞いてみたい。

- ・ グループのやり方やL S Wを具体的に聞きたかった。
- ・ 感情のわからない子どもにどのように感情のことばを覚えてもらったらよいのか、どうすれば難しい子どもをかわいらしい子と思ってもらえるのか。
- ・ 発達段階に合わせた対応とは具体的にどうすればよいのか。
- ・ 里親支援について
- ・ 学校との協力、学習支援について
- ・ 施設職員をどのように支え、育てていくのか
- ・ 教護院のような施設での話をもっと聞きたい。
- ・ 職員自身の質を向上するにはどのようなことが必要か。

遊びを使って子どもと養育者をつなぐ試み セラプレイの活用

遊びを使って病児を支援する専門職、ホスピタル・プレイ・スペシャリスト（以下HPS）を養成するプログラムを立案、実施している報告者は、これまでの研究から英国で誕生したPlay Parkの発展とともに確立されたPlay Workerに代表されるような「遊びの目的は遊びにあり、遊びは子どもの権利である」という遊びのとらえ方と、遊びの持つ治癒的な力を子どもの課題解決に応用するプレイ・セラピーの考え方、その両面からホスピタル・プレイの目的や機能をとらえることが必要であると考えられるようになった。簡略に言うならば、治療という名のもとに、排除されやすい病児の意見を表現する権利などは遊びをメディア（媒体）にすることにより保証することができるし、また治療の過程で遊びを積極的に導入することにより、病児の感情の表出を促しセルフコントロール感を取り戻し、対処方法を獲得していくことが可能になるのである。養育者と子どもの関係を遊びを使って評価し改善していくセラプレイは、ホスピタル・プレイを研究する過程で実践方法を学んだ1つのプレイ・セラピーであるが、これは隔離病棟に入院しているなど、特にストレスを感じやすい子どもとその親に対する支援方法として応用できるし、また、在宅にて療養する病児や障害児とその親の支援方法として用いることができる考えた。その他、セラプレイが効果的であると考えた領域は、子どもとのかかわりが難しいと考えている親に対する支援として、また現在のセラプレイがおこなわれているように虐待を受けた子どもと支援者との関係づくりのために用いることができると考えた。現在は、ホスピタル・プレイにだけでなく、児童養護施設の職員と子どもとの良好な関係を形成するために有効であると考え、静岡県東部にある児童養護施設においてセラプレイを用いた支援プログラムを実施している。本報告書ではその効果についても報告したい。

1. セラプレイの特徴

セラプレイは1960年代に米国シカゴで誕生したプレイ・セラピーの1つである。Head Start計画の一環として集められた就学前のスラムの子供たちに、遊びを使って集団での活動を可能にしようとしたことが始まりであるとセラプレイ創設者のひとり Phyllis Rubin

（現在86歳）は説明した。Phyllisは、幼稚園教諭として勤めた後、1960年代初頭に英国のTavistock Institute of Human Relationsで1年間研修を受けたことが、セラプレイの開発につながったという。Tavistock Instituteには、John BowlbyやJames Robertsonなど、HPSの創立に大きな影響を与えた先駆者が多く所属していた研究所でありHospital Playとの共通性を応用性を感じる。

セラプレイは子どもの抱える問題をとらえるときに、その子どもにだけ焦点を当てるのではなく、子どもと養育者の関係性の中で生じるととらえ、子どものよりよい生き方

や人とかかわる力を形成するために、遊びの力を用いて養育者と子どもの関係性を強化しようとするセラピーである。よって、基本的にセラプレイは養育者と子ども、そしてセラプレイ・セラピストが1名ないし2名入り遊びを介在させながらおこなう。

セラプレイの特徴は以下の7点にまとめることができる。

- ① 親と子どもの関係性に焦点を当てており、相互のかかわりを積極的に促す
- ② 直接的で今この時に分かる経験を形成する
- ③ 大人が信頼できる存在であることを伝える
- ④ 共感、反応、調和、リフレクションを中心に行っている
- ⑤ 左脳ではなく右脳に働きかける
- ⑥ 健康なタッチを多く使い感覚的である
- ⑦ 遊びであり、楽しい

現在イリノイ州ではセラプレイは里親と子どもの関係を改善するために用いられており、報告者が受講した初級セラプレイ講座の受講者25名も、その多くは里親を支援する機関や団体の職員であった。

2. セラプレイの活動内容と評価方法

セラプレイで用いる遊びは、とても簡単な日常に存在する道具や材料（新聞紙、ハンドクリーム、枕など）を用いておこなわれる。1つのセッションにおいて複数の遊びを連続して取り組んで行くのだが、それぞれの遊びにはディメンションがあり、セラピストは養育者と子どもの関係の強みと弱さを4つの方向性から評価し、強い部分をより強め、弱い部分を減少させるためにそのディメンションに当てはまる遊びを提供するのである。次が4つのディメンションである。

- ① Structure(構造をつくる力)。子どもは自立に向けて歩む存在だが、自立するためには安心安全な環境の中で自分自身の能力を試し、社会のルールと折り合いをつけながら成長する必要がある。この安心で安全な環境を作り、一人一人の子どもの成長にあった範囲や規範を示す力が親に求められているのである。
- ② Engagement(かかわる力)。成長の過程で、親と子のかかわりは必要不可欠であり、子どもがどのような状態や気持ちであっても、親は子どもに無関心ではなく親が子どもにかかわり続ける姿勢や考え持っている存在であることを子どもに示す必要がある。
- ③ Nurture(愛でる力)。愛でる力を親から感じながら子どもが成長する必要性に異論はないだろう。愛でる力を示すためには、やさしい体の触れあいが必要である(なでる、さする、トントンするなど)。特に継続的な医療とのかかわりや虐待を経験している子どもは、大人からさわられる経験はしているが、それは痛みや不快感を伴う場

合があるため、修正が必要である。

- ④ Challenge(挑戦する力)。親との豊かなかかわりの中で、子どもは自分の身体的、心理的、物理的限界に挑戦しようという気持ちが育み、可能性の範囲を広げていく。成長の過程には、適切な挑戦を促す親のかかわりが重要であり、信頼できる大人である養育者から挑戦を促されることは、子どもの成長に必要である。

遊びの具体例を使って4つのディメンションを説明すると、例えば、ハンドクリームを子どもの手にやさしく塗りながら小さな傷やあざ、あるいはほくろに気付き、それをこどもに言葉を用いて伝えていくというセラプレイの遊びがある。これは、養育者の愛でる力を育てるための活動であり、その後続く手形を取る活動は構造を示す力、そして手形にシッカロールをふりかけ、手形を浮かび上がらせる遊びは挑戦する力に働き掛ける分類である。最後に、その手形の大きさを養育者と子どもとで協力しながら紙テープではかる活動は、かかわる力に働き掛ける遊びである。実際、セラプレイは養育者の愛でる力をこどもに感じてもらう遊びから入ることが多く、タイムアウトなどの方法では、虐待を受けた子どもと養育者の良好な関係を築くことは難しいとセラプレイでは考えている。

3. 児童養護施設におけるセラプレイ

静岡県東部にある児童養護施設に出向きセラプレイを実践している。セラプレイを担当する子どもとともに受けた職員の感想を2つ紹介する。

職員 Aさん 3年目の児童支援員

① 担当する小学校1年生の男子の様子を振り返り

セラプレイ後、大きく変わったのは自然な形で“お膝”を求めてくるようになったと感じる。今まで、幼児が座っているところに強引に割り込んできたり、それを「うらやましい」と思う気持ちを上手く表せず、実習生さんや幼児にあたったり、私に反発？したりしていたが、「半分こしよ？」と自らお願いして一緒に座ったり、そっと自然に座るような場面が増えた。

毎日行うことはできていないが、教えて頂いた「キラキラ星」や「お天気予報」を就寝前に行うことを研修後、意識している。毎晩、就寝直前まで落ち着かなかった子どもたちが静かに布団に入り、眠りにつくようになってきたと感じている。

何気ない時間に、今日教えて頂いたセラプレイを取り入れていきたいと思います。

「ちほお姉さんダイスキ」「すごく長くて大きいんだよね」と抱きついてきてくれるようなことが見られることもある。

② 3歳の男児の様子を振り返り

・ハンドクリームを手に塗り、紙に手形をつけて魔法の粉をかける…子供はとても興味

深そうに見つめ、自分ができたときは笑顔でみせてくれた。その後、私がハンドクリームを塗っていると「塗って、塗って」と言い、「いいおてて」「かわいいおてて」「大きなおてて」など声をかけながら塗るようにすると、とても満足そうな笑顔になった。

・お菓子を食べさせてあげたり、お腹や背中をマッサージしながらお話をしたり、たくさんさんのスキンシップをとったせいか、その日のお昼寝はとても寝つきがよかったように感じた。

・その後もスキンシップを多くとるように心がけている。子供同士がけんかをして口調が強くなったり、手を出してしまった時も、スキンシップをとると気持ちが落ち着いていくのが早いように感じた。

職員 B さん 5年目の児童支援員

① 担当する小学校2年女子の様子を振り返り

・セラプレイを受け、棟に戻ってきた時から「明日の学校の支度しなきや。洋服もちゃんと出しておくれ！」といった、いつも以上に気持ちの良い発言が見られた。特に印象的だったのが、「今日はなんだか気持ちが良いんだ。なんでかわからないけど。」といった言葉で、感受性の強い R さんだからこそ、自分の気持ちの変化を感じ、言葉にしたのだろうと思った。

・その日の夜、他の棟の幼児さんが転んだ際に、「大丈夫？」と声をかけたり、保育者の近くにやってきた別の幼児さんに「本、読んであげようか？」と自ら声をかけてくれる姿が見られた。いつもなら、同じような場面では、「R ちゃんも！E おねえさん（担当支援員）は R ちゃんのだから！」と対等になってしまうことが多かったので、お姉さんらしい振る舞いに、こちらが驚いてしまった。

・研修を受けて1週間が経つが、以前よりも素直に「〇〇して」と要求したり、甘えを出しているように感じる。特に、お膝に乗る際、自然に体の力が抜けているような、これまでとは少し違った感覚があり、抱き心地・居心地の良さをこちらが感じている。わたし自身も今まで以上に自然と心から「かわいい」「ギュッとしたい」という気持ちが生まれてくる瞬間が増えたように思う。（以前は何かしら注意したり、ぶつかり合う事の方が多く、どこかすっきりと気持ちの切り換えが出来ず、引きずったままの関わりが多かったのだと思う）

・その後、ぶつかり合うことが全くなかったわけではないが、どこか自分の中でも「大丈夫。また受け止められる。」という今までとは少し違った思いがある。担当している6人の中でも、関係性の面では特に気になっていた麗羅さんと一緒にセラプレイを受け、R さんの変化もたくさん見られたが、自分自身の R さんに対する気持ちの変化も感じている。

Recruitment of Foster Carers

英国における里親のリクルート

英国の里親養育の国の最低基準マニュアルから (DVDは用意されていない)
(翻訳者 開原久代)

里親のリクルート

目的は、里親委託が必要と確認された子どもと若者たちのニーズに答えるために十分で多様な範囲の里親が供給できるように維持すること、そして子どもたちが委託を選択できるようにするために十分な数の里親を用意することをめざしている。

里親担当チームは、募集、準備研修、里親調査の責任をもっている。

募集のやり方は包括的なものである。どこにも典型的里親というものはなく、彼らが世話をする子どもたちのニーズの多様性を熟慮してゆくべきものである。

チームは、里親を希望する候補者すべてに、準備研修を提供する。この準備研修は里親ネットの「里親へのスキル」というコースである。

一般的に、里親委託のソーシャルワーカーと経験のある里親と一緒に研修を担当し、夜か、週末に実施され、半日セッションが6日以上となっている。

里親募集の手順 準備研修応募に際しての最初の調査

チームの管理担当者が基本調査凡てを扱い、情報の資料パックを調査担当者に調査当日に急送する。

凡ての基本調査データは管理担当者を通して担当ワーカーに渡され、里親になることに関心の持ち方について討議される。

調査をすすめるには次のことが要求される。

調査から得られる情報と問い合わせる領域

調査では、対象者は、情緒的安定、生活の安定と、他人の子どもの世話をするだけの環境と現実の状況 (設備、仕事のスケジュールなど) が必要であることを理解することが重要である。

大事なことは、養育を担当する人が家に一人以上いること、志願者が夫婦の場合、両者とも調査と準備研修が必要となっている。また、実子たちを含めて家族状況についてソーシャルワーカーとの個別面接が必要であること、最初の家庭訪問に際して、ソーシャルワーカーは、調査対象者だけでなく、子どもの世話を分担する家の中の人々凡てに会う必要がある。

もし、養育者がパートナーと暮していれば、その人も同席し、さしつかえなければ準備や評価の作業を一緒にしてもらおう。

準備研修

里親養育の技術 里親準備の概略

1. 自己紹介 お互いを知る演習
2. 里親養育を必要とする子どもと若者について

3. 里親委託に至った理由を考える
4. 里親はどんなことをしているか？ DVD紹介
5. 里親の適性—能力を里親実務に生かすには
6. 名前に込められている意味を考える。アイデンティティや歴史など
7. 皆、人生に平等のチャンスをもっているのではないか？
8. 人々が人生で出会う機会とそれぞれの違いを考える
9. 平等と代弁者の必要性を語る時の基本用語
10. アイデンティティと喪失—親元の環境から離れて里親委託される子どもたちが耐え忍ぶ事柄を考える
11. 子どもと若者たちは誰なのか？ DVD映像から。この子どもと若者たちは皆、ある時期、里親ケアを受けていた
12. 子どもを家に連れてくること。あなたにとってどうでしたか？
13. この写真の中にいる人の他に誰かいますか？緊急時には誰がこの子どもにかかわってくれるのですか？
14. 法律では里親養育や子どもの権利についてどんなことを言っていますか？
15. 実親や祖父母たちとのかかわり方についてのDVD映像
16. 里親と実家族の両方の期待を配慮すると、あなたは何を求めますか？
17. 実親と共同で働くには
18. 虐待とネグレクトとは？
19. 里親家庭にとって、より安全なケアとは何を意味するのか—里親の立場から—DVD映像
20. 里親とその息子たち、娘たちが語る—他の里親たちの見方—DVD映像
21. 危険な仕事—安全な養育を確保する実践的方法を考える
22. 里親の家庭をより安全にするには
23. 発達の面について—発達段階と行動の扱い方をむすびつけること
24. レジリエンス（立ち直る力）の意味—自分たちの成長に影響を与えた人々や出来事を思い出してみよう
25. 愛着と喪失—子どもの発達における愛着の重要性をさぐる
26. 若者とケアラー（養育者）たちの行動についての語らい—DVD映像
27. なぜ子どもたちは移動（措置変更）するの？その理由をさぐる
28. 移動と変更（措置変更）にうまく対処するには—こうした移動が里子たちと里親たちとその家族に与える衝撃を考える
29. たらいまわしされること—若者とケアラーたち、実親が語る彼らの体験—DVD映像
30. 自分たちの貴重な事柄である記憶を保持すること—ケアラー（養育者）たちは若者が過去に屈することなくきちんと理解できるように助ける方法をみつける

里親調査のための基本情報

里親養育の経験があるか。関連する技術をもつか。健康情報。犯罪歴、保護観察記録、福祉サービスや警察下にあったか。以前に里親や養子縁組や児童福祉員（チャイルド・マインダー）に応募したことがあるか（家族の他のメンバーについても。また調査で不採用になったか） 志願者とそのパートナーの勤務時間。家庭にすでに子どもがいるか、その関係は。家族全員が協力的か。里子として希望している子どもの人数と年齢範囲、性別。興味ある里親の種類、レスパイトか家庭養育か再統合か。

基本調査のためのガイダンス

1. ケアラーの年齢 一般的に21歳から65歳
2. 生活歴との関係と意義 安定性があること、際立った生活の出来事、たとえば離婚、別居、誕生、死、健康問題などがある場合、安定性と回復について検討を要する。
3. 里親の実子のこと a) 里親の実子が生後6か月以上である場合のみ受け付ける。 b) 同じ発達段階の子どもを受け入れた場合の利害の葛藤を避けるために、理想的には、里親の実子と里子には2年の隔たりが望ましい。 c) もし、里親または実子が以前”社会的養護”を受けた場合、それが現在のことか最近のことか検討する必要がある。①里親養育の動機 ②実子と親業スキルとの関係。③福祉機関やその他の機関と協働で働く能力
4. 部屋を共有する場合
リスクについて検討：子どもは被虐待児か、虐待する子か。子どもは部屋を共有しているか
5. 仕事の委託 0~5歳の就学前の子どものためには、家庭で24時間一緒である必要がある。学齢の子どもでは、登校前と下校後、休日と子どもが病気の時には手はずが整えられるようにする。
6. (チャイルドマインド) 保育委託 保育委託を受けている場合は、ケアラーは8歳以下の子どもの里親委託は出来ないし、委託外の特別な子どもの保育もできない。もし、ケアラーが8歳以上の子どもを里親委託して、保育委託もうける場合は、里子と保育委託の措置人数に関して照会と同意が必要。
7. ペット どんなペットがいるか、子どもとどうかかわっているかも明らかにする必要がある。このことは、健康・安全部署を通して調査される。
8. 住宅 これは永代的で安定していることが必要で、調査で確かめられる。過去5年間の住所が必要。
9. 訪問者 頻繁な客や、18歳以上で家に泊まったり住み込んでいる人物は皆警察チェックが必要で、彼らや家族にもたらす養育の影響について話し合う機会を持つべきである。
10. 夫婦と家族の人々 志願者は夫婦として暮らしているか、養育の仕事を手伝う一人以上の人が家族にすることが必要で、パートナーたちは凡て審査を受け準備研修に参加することが必要である。
11. 約束 ケアラーは凡て研修と支援グループに参加することが公約となっている。
12. コミュニケーション 志願者の第一言語に関するコミュニケーション事項、読み書きの困難、聴力や言語の障害への配慮が必要である。
13. 電話 里親は凡て電話による連絡が出来るようにすべきである。

里親養育のための物理的なスペースがあるか（家の概観）？

庭を含めた家の適性—広さ 安全性 清潔 一般状態
 里子の寝るところの設定 寝室の数 遊んだり勉強する場所 緊急時には里子は自分の部屋をもてるか 家は安全か 障害物があるか ペットがいるか

志願者の勤務時間と里親養育との関係は？

志願者が関心をもつ里親の種類、委託児の人数と年齢範囲

短期里親 長期里親 家族交流（再統合） レスパイト

里親養育をめざす志願者の興味と動機

家族全員が里親の仕事に協力的か？

志願者の実子たちの意見は？
 志願者は里親養育が実子にどう影響するか考えたか